

平成30年度 第27回 加古川市青年海外派遣団 報告書



公益財団法人 加古川市国際交流協会

Kakogawa International Association

目 次

ごあいさつ

加古川市長 岡田 康裕	1
-------------	---

青年海外派遣

団員プロフィール	2
----------	---

派遣団日程表	3
--------	---

事前研修	4
------	---

結団式、事後研修、帰国報告会	5
----------------	---

団員レポート	6
--------	---

派遣研修の記録	18
---------	----

これからの活躍を期待して

近年、情報通信技術の著しい進歩にともない、私たちは世界各地の情報を容易に得ることができ、世界を身近に感じることができるようになりました。

地方自治体や民間団体はもちろん、個人においても、外国の人々との交流が図られ、異文化への理解を深める機会が増えています。また、訪日外国人が飛躍的に増加しており、加古川市内でも外国人を目にする機会が増えてまいりました。

このような状況において、加古川市では、昭和48年、ブラジル・マリンガ市との姉妹都市提携を契機に、「地域に根ざした国際交流」を目指して、青少年の海外相互派遣をはじめ、在住外国人との交流など各種の事業を実施しています。

加古川市青年海外派遣事業は、姉妹都市等での交流を通じて国際的視野を持ち、国際親善に貢献できる行動力のある国際人を育成することを目的として実施しており、平成4年に第1回目の派遣団をブラジル・マリンガ市に派遣して以来、毎年欠かすことなく派遣を続けています。27回目の派遣となる今回も6名の青年を派遣し、相互理解や友好親善を深めてまいりました。

本年はブラジルへの日本人移住が始まって110周年を迎える記念すべき年でもあります。7月にはサンパウロ、マリンガで大規模な祝賀式典が開催され、まだその余韻が漂う中での訪問機会を得ることができました。派遣生たちは、マリンガ市民の心からの歓迎に触れ、言語を超えた人との繋がりの大切さを改めて感じるとともに、日系の方々との交流を通して、日本、加古川への愛着を深めることができたと思います。今回の派遣を機に、派遣生たちが地域社会、さらには国際社会の一員であることを認識し、国際人として活躍されることを大いに期待しています。

結びになりますが、この青年海外派遣にあたってご理解、ご協力を賜りました関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成30年12月

加古川市長 岡 田 康 裕

団員プロフィール



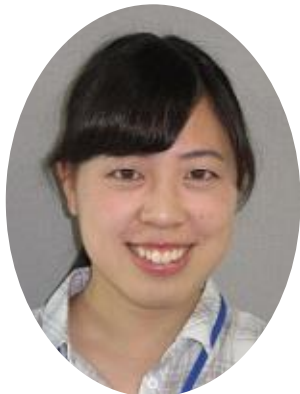
井上 夏海
INOUE NATSUMI



大角 奈央
OSUMI NAO



小口 未羽
KOGUCHI MIU



高山 あすか
TAKAYAMA ASUKA



堀江 佑実
HORIE YUMI



宮城 佳奈
MIYAGI KANA

団長

市村 裕幸
ICHIMURA HIROYUKI
加古川市副市長

引率

森田 英樹
MORITA HIDEKI
(公財) 加古川市国際交流協会事務局次長

派遣団日程表

(EK:エミレーツ航空 G3:ゴル航空 LA:ラタム航空)

月日(曜)	場 所	交通機関	行 程	宿 泊
平成 30 年 8 月 7 日 (火)	加古川発 関西空港 (KIX)	市バス EK317		機中泊
8 月 8 日 (水)	ドバイ着 (DXB) ドバイ発 (DXB) サンパウロ着 (GRU)	EK261 専用車		サンパウロ泊
8 月 9 日 (木)	サンパウロ発 (CGH) マリンガ着 (MGF)	専用車 G3-1154	サンパウロ市内視察(セー広場、東洋人街、日本移民史料館) マリンガ外国語センター25 周年式典 歓迎夕食会	マリンガでの ホームステイ
8 月 10 日 (金)	マリンガ		サンフランシスコザビエル学校視察 ウニセズマール大学視察 マリンガ市議会表敬訪問 カトリック(マリンガ)大聖堂視察 マリンガ市役所表敬訪問 パラナ福祉和順会老人ホーム視察	マリンガでの ホームステイ
8 月 11 日 (土)	マリンガ		マリンガ日本庭園視察 農場視察 ホストファミリーとのプログラム	マリンガでの ホームステイ
8 月 12 日 (日)	マリンガ		ホストファミリーとのプログラム お別れ夕食会	マリンガでの ホームステイ
8 月 13 日 (月)	マリンガ発 (MGF) サンパウロ着 (GRU) サンパウロ発 (GRU) イグアス着 (IGU)	G3-1111 G3-1170 専用車	イグアスの滝(ブラジル側)視察	イグアス泊
8 月 14 日 (火)	イグアス発 (IGU) リオデジャネイロ着 (GIG)	専用車 LA4591 専用車	イグアスの滝(アルゼンチン側)視察	リオデジャネイロ泊
8 月 15 日 (水)	リオデジャネイロ	専用車	リオデジャネイロ市内視察 (イパネマ海岸、エスカダリア セラオン、セントロ地区、 コルコバートの丘、ポンジ・アスカル)	機中泊
8 月 16 日 (木)	リオデジャネイロ発 (GIG) ドバイ着 (DXB)	EK248		ドバイ泊
8 月 17 日 (金)	ドバイ	専用車	ドバイ市内視察 (市場、アブラ乗船、ジュメイラモスク、ドバイ博物館など)	機中泊
8 月 18 日 (土)	ドバイ発 (DXB) 関西空港着 (KIX) 加古川着	EK316 市バス		

事前研修

選考会で選ばれた6名の派遣生は、加古川市の代表としてマリンガ市等を訪問することの認識を深めるとともに、ブラジルやマリンガ市の歴史と文化を理解することを目的に事前研修を実施しました。本年は気象警報による研修中止や視察の中止などが続き、例年と比較すると大変密度の濃い内容で研修を実施することになりました。

ポルトガル語研修では、第1回目の青年海外派遣生である胡重尚子氏を招いて、あいさつや家庭内での基本的な会話など、ポルトガル語の基礎を学習しました。

また、マリンガ市のお別れ夕食会で披露する派遣生によるアトラクションについては、ソプラノリコーダー、アルトリコーダーによる「上を向いて歩こう」の合奏に決定しました。時間が限られる中、研修の終了後に集中して練習を行いました。

事前研修日程

実施日		内 容	場 所
第1回	6月30日（土）	オリエンテーション 自己紹介 ポルトガル語研修	加古川市国際交流センター
第2回	7月7日（土）	※気象警報発令のため 中止	
第3回	7月28日（土）	訪問地研究発表 自己研修テーマ発表 交歓プログラムの練習	加古川市国際交流センター
第4回	8月4日（土）	結団式・壮行会	加古川市国際交流センター



ポルトガル語研修

結団式

8月4日（土）国際交流センターにて、結団式を実施しました。加古川市長や市議会議員から激励の言葉をいただき、加古川市を代表して派遣されることへの責任を改めて感じました。また、リーダーの小口さんが派遣にかかる意気込みを力強く宣誓しました。

国際ソロプチミスト加古川より、現地で使用するショルダーバックをいただき激励していただきました。



事後研修

9月2日（日）国際交流センターにて事後研修を実施しました。

現地での経験を今後どのように生かしたいかなど、意見を交わしました。「もう一度マリంగా市を訪れたい。」と語るとともに、「マリంగా市の方々の日本や加古川市に対する想いを伺うことができた。」「これまでの交流で築き上げてきた人のつながりや姉妹都市提携の意義等を改めて感じる事ができた。」などの感想を述べていました。



帰国報告会

11月4日（日）、国際交流セミナーの一環として青年・中学生海外派遣団の合同帰国報告会を実施しました。それぞれの派遣生から、現地での経験や学んだこと、これから取り組んでいきたいことなどを岡田市長をはじめ関係の皆様へ報告しました。

私の初めての海外旅行はオーストラリアで、高校2年生の時でした。それまで日本から出たことがなく、オーストラリアで日本と全く違う景色、食べ物、文化を見て、すごく衝撃を受けたことが今も鮮明に思い出せます。その時から、いつか海外で生活してみたいという思いがあり、大学に入ってからは何力国かに留学や観光に行っていました。今回、加古川市が毎年ブラジルに海外派遣事業を行なっていると言うことを母から聞き、絶対に参加したい！と思い、すぐに応募を決めました。



ブラジルに着いて、一番驚いたのは食文化の違いです。ブラジルの郷土料理には、塩漬けにした牛肉や豚肉を黒豆で煮込んだ「フェイジョアーダ」、モチモチのチーズパン「ポンデケージョ」、パイ包みのフライ「パステル」、ブラジルの焼肉「シュラスコ」など、日本では見たことも、食べたこともない料理ばかりで、最初は見た目に戸惑ってあまり食べられませんでした。次第に慣れてきて最終日にはおなかいっぱいになるまで食べていました。ブラジルは海に面している国なのにほとんど魚料理はないのはなぜだろうと思っていたら、マリンガで日本料理を食べに行ったとき、日本人の店員さんが「ブラジルの人は、骨をとるのが面倒であまり魚を食べない」と教えてくれました。ブラジル人らしい理由で面白いなと思いました。

ブラジルに着いた2日目の夕方、姉妹都市であるマリンガに向かいました。マリンガで過ごす4日間はホームステイで、ホストファミリーと仲良くやっていけるか、少し不安でした。



でも、空港に着くと、ホストファミリー達がすでに集まっていて、私たちの到着を暖かく歓迎してくれたので、すぐに不安はなくなりました。私は、堀江さんと一緒に、イチバさんファミリーにホームステイさせていただきました。イチバさんファミリーは、4人家族で、お母さんと長女のナオミは日本語で話しかけてくれて、お父さんと長男のユキオさんは日本語をあまり話せませんでしたが、知っている日本語を使って私たちに話しかけてくれました。また、日本にとっても興味を持ってきていたことも嬉しかったです。事前研修で、ブラジルは日本人移民が

たくさんいたことは学んでいたのですが、日系人がいることも知っていましたが、実際に日本のほぼ反対側にあるブラジルで日本語が使われているのを見ると、とても不思議な気持ちになりました。マリンガで特に思い出に残っているのは、ピザパーティーです。他のホストファミリーのお父さんやお母さん達が美味しいピザを焼いてくれました。そのパーティーには地元の子も何人か来ていて、一緒にデザートを作ったり、自己紹介をお互いの言語で言い合ったり、手押し相撲やゲームをして遊びました。みんな私たちに気さくに話しかけてきてくれて、仲良くなるのに言葉が通じる、通じないは関係ない、と改めて実感しました。他にも、ホストファミリーと買い物や日曜日の市場に行ったり、一緒にブラジルのカレーを作ったり、



ネイルをしたりしました。たった4日間という短い時間でしたが、私にとって本当に濃い時間でした。加古川市の姉妹都市、マリンガ市は人も街並みも本当にいい所だということがとてもよくわかりました。マリンガを出発する日の早朝、空港でホストファミリーとお別れをするときは本当に悲しかったです。ずっとマリンガに居たいと思いました。でも、「日本に遊びに行くよ」と言ってくれたので、日本に来たときには私が同じように最高のおもてなしをしようと思いました。マリンガを出発してからは観光がメインで、イグアスの滝、リオデジャネイロ

などに行きました。イグアスの滝は、テレビや本で何度か見かけたことがありましたが、実際に行ってみるとその迫力に圧倒されました。ブラジル側では、ボートに乗って滝に突っ込みました。まさか滝に打たれるとは思っていなかったので全身ビショ濡れになりましたが、とてもスリルがあって楽しかったです。アルゼンチン側の悪魔の喉笛は、隣にいる人と会話するのに、大きな声を出さないと聞こえないほど大きな音でした。リオデジャネイロでは、キリスト像が曇っていて見えにくかったのが残念でしたが、普通の観光ではいけないようなところにも連れて行ってもらえて、ブラジルのことをさによく知れたような気がします。

最後に、第27回加古川市青年派遣生としてブラジルを訪れたことによって、日本人とは違う価値観、視点を知ることが

出来ました。これから、今回の海外派遣での貴重な経験を活かして、日本と海外を繋ぐことが出来るような国際的な人になりたいと思います。国際交流協会の皆様をはじめ、海外派遣に関わっていただいた皆様、本当にありがとうございました。



大学からのメールに、「加古川市姉妹都市ブラジルのマリンガ市へ！参加青年を募集」とあり、加古川という文字に反応し、メールを確認したことがこの加古川市青年海外派遣に関わるスタートでした。

地球上で日本の反対側のブラジル。今後行ける機会はあるのだろうか？そう考えた時にブラジルでのホームステイはきっと二度と出来ない経験だろうと思い参加を決意しました。このブラジル渡航に参加する前は恥ずかしながら、加古川市とマリンガ市の姉妹都市関係が45年も続き、今年日系移民110周年を迎えたことすら知りませんでした。ましてや、ブラジルについてはサンバカーニバルやサッカーが有名である程度の知識しかありませんでした。

私がこの研修で一番楽しみにしていたホームステイ先は、非常に気さくなご夫婦と2匹の犬がいるご家庭でした。英語でのコミュニケーションは難しく、初日は聞き取れなくても聞き直すことが出来ず、自分から質問することが出来なくて戸惑いながら過ごしていましたが、うまく話せなくても私の話に耳を傾けてくださり、たくさんブラジルの文化についても教えていただくうちに、不安や戸惑いがいつのまにか無くなっていました。ブラジルでの滞在でホームステイを経験できたことは直接文化や生活を感じることができ、旅行としてブラジルを訪れるのとはまた一味違った経験をする事ができたと思います。

マリンガ滞在最終日の日曜日はホストファミリーの家の近くで日曜市が開催されており、

そこへ連れて行っていただきました。新鮮な食材から様々な生活雑貨まで非常にたくさんの種類のお店が向かい合うように並んでいて、多くの人でにぎわっていました。日本では見かけないナッツ類や果物もたくさんあり興味津々でみると「日本人？食べてみる？」話しかけていただき、多くのお店で試食させていただきました。すれ違う人も「コンニチハ」「アリガトウ」と日本語で何度も声をかけてくれました。その市場で一人の男の子がホストファミリーに話しかけポルトガル語で少しやり取りした後に私に



向かって「ニホンガダイスキ」と声をかけてくれ、とても嬉しかったです。



ブラジルに滞在している間本当にたくさんの方が私に話しかけてくださり、初めて会う人も友達のような距離感で接していたり、挨拶でハグを行う文化など、人と人の距離が日本よりも近いことがとても印象的であるとともに新鮮で、楽しかったです。リオでガイドさんが連れて行ってくださった「エスカダリア・ド・セラロン」は、チリ人の方が階段にタイルを貼りつくられた場所で多くの観光客がいましたが、その華やかな場所でも夜に立ち入ることは非常に危険で、周りにはここより一本奥の道は通っては危ない場所があると

教えていただきました。私はブラジルにスラム街があることは事前研修などでも教えていただいていたため知っていましたが、訪れてみて驚いたことはそのようなスラム街を夜に見ると非常に明るく輝いて見えることです。私はスラム街＝暗いと思っていました。しかし移動のときに上から見るスラム街はほかの街よりも明るくて、人々が密集しているからだを教えていただき、実際に見てみることで知れることがあることを体感しました。今回、加古川市青年海外派遣団への参加は私のブラジルへのイメージを大きく変化させたと同時に、“百聞は一見に如かず”という言葉の通り、自分自身で直接見て、経験することの大切さを実感しました。日本から見ると地球の反対側にあるブラジルにはなかなか簡単には訪れることが出来ませんが、加古川市とマリンガ市が45年間の姉妹都市関係を続け27回もの青年派遣を行っているということが両市の友好関係の深さを表し、素晴らしいものであると思うとともに、両市の関係を築く派遣事業に参加できたことを非常に嬉しく思います。

現地でお世話になった多くの方々はじめ、国際交流センターの皆様、派遣団のメンバーに感謝申し上げますとともに、加古川市・マリンガ市両市の友好関係のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。



私は、母から加古川青年海外派遣団があることを聞き、日本の反対側のブラジルなんて一生で行く機会が無いかもしれないと思い、第27回加古川市青年海外派遣団に応募しました。

派遣のための事前研修は、台風などの悪天候で中止になり、研修の回数が少なかったため、少し不安な気持ちのままブラジルへ出発の準備をしていました。しかし、今回の加古川青年海外派遣団のメンバーは大学生の女子6人だったため、すぐに打ち解けることができ、ブラジルへ出発が近づくとつれ、とても楽しみに変わってきました。

加古川市の姉妹都市であるマリンガ市で「かこがわ」という言葉が、普通に通じることにとっても驚きました。サンパウロ、リオネジャネロにも行きましたが、「かこがわ」という言葉は、全く理解されませんでした。また、マリンガ市では、「加古川」という単語を出すだけで、大変喜んでくれたことに、とても感動しました。しかし、加古川市では「マリンガ」という単語についてあまり認知されておらず、長い間、姉妹都市としての友好関係がある市であることを知らない人が多くいます。私自身も、この海外青年派遣団に参加するまで知りませんでした。そこで、私はマリンガの方たちが、なぜ加古川のことを知っているのか疑問に思いました。

この度、マリンガ市に行って初めて知りましたが、マリンガ市には、「加古川大通り」がありました。日本からこんなに遠く離れた国に、加古川市の名前のついた道があることが本当に感動でした。そして、この道のことは、住んでいる人が知っているため、加古川という単語は日常で良く聞く単語ということがわかりました。マリンガ市において加古川市と絆をととても強く感じることができました。それに比べ、加古川市にあるマリンガ通りについては、加古川市では、知らない人も方が多いように感じます。お互いに素晴らしい友好関係の証なので、多くの人に知ってもらいたいと思いました。また、マリンガ市での3泊4日のホームステイは大変短く感じました。皆さんは年齢に関係なくとても





パワフルでした。私は、ホストファミリーのお友達が誕生日ということで、誕生パーティーに参加させてもらいました。私が参加した時間はすでに夜中12時過ぎでしたが、お年寄りから子どもまで盛り上がり、大変にぎやかなパーティーで、私も疲れが飛んでしまうぐらい元気になって帰ってきました。また、マリンガ市では、夜遅くても帰宅する前には、サンドウィッチを食べに行ったりするらしく、みなさんが食欲旺盛なことにとっても驚きました。マリンガ市では、毎週日曜日に公園の周りの片方の道路を封鎖し、そこでサイク

リングやフリーマーケットなどが行われています。私は、サイクリングをしながら街をまわり、街や人々の様子を身近に感じることができて、とても良かったです。また、私がいた日がブラジルの父の日だったため、ホストファミリーの家では家族がお昼に集まり、一緒に食事をするらしく、親戚の方々と一緒に私も参加させてもらいました。そこでは日本語とポルトガル語が飛び交う会話の中、盛大に行われとても不思議な空間でした。

今回の加古川青年海外派遣団に参加して、日本から一番距離が離れているブラジルですが、とても距離を近く感じることができました。私は今までにブラジル以外で7カ国程行ったことがあります、その中でも圧倒的にブラジルが一番良かったです。ブラジルは英語が伝わらない分大変な部分もありますが、言葉以外のノンバーバルコミュニケーションの大切さを学びました。人と人との距離の近さ、誰でも受け入れる文化がブラジルにはあるのだと思いました。ブラジルと比べると日本の方が交通面や生活の利便性はあるかもしれませんが、し、人とのつながり、その人らしく生活していくこと、時間の余裕さなどは、圧倒的にブラジルの方が良いと肌で感じました。

今、日本では人との繋がり、地域の人との繋がりが希薄になっているといわれていますが、この度ブラジルに行くことで改めてその大切さを学びました。

この度は、ホストファミリーをはじめ、多くの方に大変お世話になりました。また、青年海外派遣団に参加することで、素晴らしい人、仲間との出会い、そして貴重な経験をたくさんすることができました。今後は、私自身マリンガ市とのつながりを大切に続けていき、そのつながりに関わっていきたいと強く思います。

最後になりましたが、このような機会を与えてくれた両親、加古川市に感謝をするとともに、マリンガと加古川市の文化交流の発展をお祈りいたします。

本当にありがとうございました。Muito obrigada!!!



学生最後の夏、今しかできないことに挑戦してみよう。これが私の夏の目標でした。先日初めて海外へ旅行したことをきっかけに、海外のいろんな所へ行ってみたいという気持ちがとても強くなっていったとき、祖父から1本の電話が入りました。「ブラジル行ってみるか？」最初は驚きましたが、地球の反対側にあるブラジルなんてそう簡単に行ける場所じゃない、今しかない、そう思い、すぐに行くことを決意しました。



渡航前に行われた事前研修では、ブラジル移民の歴史、加古川市とマリンガ市のつながり、ポルトガル語などを学びました。どんな人に会えるのだろう、どんな景色が見られるのだろう、そんな楽しみな気持ちが増えていく一方、言語が違う人と通じ合えるのだろうか、治安が悪いなか犯罪に巻き込まれないだろうかという不安もだんだんと大きくなっていきました。

8月7日に日本を出国し、ドバイを経由してブラジルへ到着しました。サンパウロでの市内見学を終え、いよいよホームステイさせていただくマリンガ市へと向かいました。12日間の派遣研修の中でも特に印象に残っているのが、マリンガ市到着の瞬間です。マリンガ市へ着陸した飛行機を降り荷物をとって到着ロビーに出た瞬間、たくさんのホストファミリーたちの拍手と歓声に出迎えられました。まるで有名人が来た時のような雰囲気にとっても驚いたのを覚えています。私たちが日本から来ることを心の底から歓迎してくれていることを強く感じました。マリンガ市の方々はみんなあたたかく、自然が豊かで本当に素敵なところでした。駒込農場の見渡す限り一面のトウモロコシ畑で、空がこんなにも大きいことを知りました。マリンガ市の中心に立つマリンガ大聖堂、大きな日本庭園、加古川通りや日本料理のお店などからブラジルにいながらも日本を感じ、ブラジルと日本、マリンガ市と加古川市のつながりの深さを実感しました。

ホームステイでは、18歳の兄、10歳の弟、7歳の妹のいる5人家族にお世話になりました。英語での日常会話ができるのは18歳の兄だけだったため、英語とポルトガル語の通訳をしてもらいながら家族とコミュニケーションをとりました。しかし、私にとって初めてのオールイングリッシュでの生活。ホストマザーは初日に、「言葉はわからなくても心で通じ合うことができる」と



私に伝えてくれましたが、マリンガ空港からホストファミリーの家に向かう車中で英語とポルトガル語が飛び交う中、英語をうまく聞きとることができず不安と緊張が募りました。次の日から、ホストファミリーは私をいろんな所へ連れて行ってくれました。ショッピングモールやスーパー、日本料理屋、大きな公園。そして行く先々で出会う知り合いや店員さんに、私が日本から来てホームステイをしていることを紹介してくれました。出会った人みんなが大歓迎してくれたのを覚えています。そして、ハグや言葉を通して愛情や感謝の気持ちをたくさんの人に伝えていました。日が経つにつれ英語での会話にも慣れてきて、兄との日常会話はスムーズにできるようになりました。そしてもっと驚いたことに、英語の話せないホストファザーやマザー、弟や妹とも簡単な英語やジェスチャーを駆使して気持ちを伝えられるようになった



のです。ホストマザーが初日に私に言った言葉は本当だったのだと実感しました。言葉は違うけれど、伝えたい気持ちがあれば伝わるということ学びました。「伝えたい」という気持ちを強く持つこと、その気持ちを言葉や行動に表すこと、これが日本でも海外でも人とコミュニケーションをとるときに大切なことであると思います。

最後に、私たちをあたたく迎えてくださったブラジル現地の方々をはじめ、加古川市国際交流協会の皆様、今回の青年海外派遣に関わる全ての方々に感謝申し上げます。今後も加古川市とマリンガ市が長く深く友好関係を続けていかれることを願っています。大変貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。



私は、ブラジルのマリンガ市が姉妹都市で、加古川市と長い交流があるということは、今回の加古川市青年海外派遣に応募するまで知りませんでした。応募のきっかけは、「ブラジルなんて、このチャンスを使えば二度と行く機会はないし、何より海外に行ってみたい」という安易な考えでした。高校の修学旅行でしか海外に行ったことがなかったので、漠然と海外に対する憧れがあったからです。しかし、無事に派遣生に選ばれ、「もしひったくりにあったら襲ってくる可能性があるため抵抗はしてはいけない」「夜はむやみに出歩いてはいけない」という事前研修での注意点を聞いているうちに不安になって、ブラジル＝怖い・危ないというイメージが強くなっていました。

そして、いよいよ出発日。私は人生で一番長いフライトを経験しました。やはり、丸一日飛行機に乗ると、体のあちこちが悲鳴を上げていて、ブラジルは日本の反対側にあるということをもっと感じました。

サンパウロ市内の観光では、やはり日本移民史料館が印象的でした。「ハルとナツ」のDVDを事前に鑑賞していたため、時代背景や当時の様子が想像しやすく、より理解が深まりました。特に、当時の再現家屋はリアルで、生活の苦しさを物語っていたけれど、どことなく日本らしさを感じました。過酷な労働に耐え、時代を生き抜いた日本人の強さを学ぶことができました。ブラジル日本人移民 110 周年という記念すべき年に訪れることができ本当に良かったです。



その後、マリンガでホストファミリーと対面しました。空港に着くと初めて会った私たちを温かく歓迎してくださいました。驚きと同時に、その温かさに感動しました。歓迎の食事会でも、たくさんの人が「こんにちは」と声をかけてくださり、どこに行っても私たちを歓迎してくださった心優しいマリンガの人たちのことが大



好きになりました。ブラジルに対してのマイナスの情報だけを見て、勘違いしていた私の中の悪いイメージは消えました。また、私がお世話になった家庭は、日本語が話せたため、会話は苦労しませんでした。お父さんは、あまりたくさんは話せなかったけれど、車で何度も送り迎えをしてくれて、とても優しい人でした。お母さんはいつもニコニコしていて、楽しい話をいっぱい話してく

れたり、寒いと言うとコートを貸してくれたり、体調が悪くなったときに「ゆっくり休んでいいよ」と優しく声をかけてくれました。お兄ちゃんは、朝ご飯を用意してくれたり、朝早くに集合場所まで送ってくれました。なおみちゃんは年齢が近いというのもあって、たくさん喋ったり、写真を撮ったり、ゲームをしたりと、とても仲良くなりました。4日間はとても楽しく充実していて、あっという間に過ぎてしまいました。本当の家族のように接してくれた Claudio Ichiba 家には感謝の気持ちでいっぱいです。この出会いは、私にとって一生の思い出になりました。

イグアスの滝では、どこを見ても滝が広がっていて、その迫力に圧倒されました。滝のぎりぎりにまで近づくことができたので、水しぶきでできていた虹がとてもきれいに見えました。ブラジル側とアルゼンチン側の両方から見ることで、同じ滝なのに、全く違う二つの顔が見られて面白いなと思いました。また、ボートに乗った時は、容赦なく滝に突っ込んでいたので、濡れ方は尋常ではなかったけれど、身をもって滝の勢いを感じることができたので、いい経験ができました。

この加古川市青年海外派遣を通して、たくさんの貴重な経験をさせていただきました。マリンガ市との交流は、互いの文化・歴史を知ったり学んだりするだけでなく、様々な人との出会いが、一生忘れられないかけがえないものになりました。若者が様々な経験や出会いを通して、価値観を見つめ直すこと、視野を広げることができるこの交流を今後も続け、マリンガ市のことをもっとたくさんの加古川市民に知ってほしいと思います。

最後に第27回加古川市青年海外派遣に関わってくださったすべての人に感謝申し上げますとともに、加古川市とマリンガ市の更なる発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。



私のホームステイ先は兄のルイスが日本語学校に通っていて少し日本語が話せましたが、ほとんどがポルトガル語でした。私は「ありがとう」「はい・いいえ」「おはよう」「自分の名前」しか話せなかったのでも戸惑いました。特に、最初は緊張や不安もあり必要な会話はほとんど翻訳アプリを使いました。その日の歓迎夕食会では、ほかの派遣生のお家の日系の方を通じて話しました。話をしていくうちにとても仲良



くなれ、4日間コミュニケーションは大変かもしれないけど楽しみになりました。2日目からは前日に自分で伝えることができなかったのが少し悲しかったので、ジェスチャーや絵など自分で伝えるようにし、なるべく翻訳アプリを使わないようにしました。ポルトガル語では何というの？と聞きたくさんの単語を教えてくださいました。会話は難しいけれど、「おいしい」や「かわいい」など一つの単語だけでもお店やご飯の時に伝わると喜んでくれたし、嬉しかったです。日本語を教えると「好き」や「かわいい」「おやすみなさい」は良く使ってくれました。

ブラジル人は明るく優しくかったです。歓迎夕食会では不安だった私にいつでも困ったら電話してと言ってくれたり、「昨日は困ったことはなかった？」やポルトガル語を教えてください、「カナちゃんはポルトガル語うまくなるよ」と言ってくれたり、また訪問先では皆さんが歓迎してくれ、ブラジルのことをいろいろ教えてくださいました。2日目の夜のピザパーティーでは「若太鼓」のメンバーと仲良くなり、みんなでピザを食べたり、ゲームをしたり、年齢はバラバラでもとても仲が良く、その空間に入ることができて良かったです。



ホームステイ4日目は、加古川名物の「かつめし」を家族で作りました。「かつめし」の作り方は、ジェスチャーやルイスの助けを借りてできるだけ自分で説明しました。

ブラジルのカツはとても分厚かったのが薄くするためにマリアが一生懸命肉をたたいてくれました。そのあとは、三人で小麦粉、卵、パン粉、と順番につけていきました。途中で手がベトベトになったり、加古川の「かつめし」のキャラクターの説明をしたり、マリアが日本語で「かつめし」と

書こうと「かつめし」の「つ」が逆になったりと、楽しんで作りました。盛り付けも平たいお皿にお米をよそい盛り付けました。いざ食べてもらうときは緊張しましたが、カタコトで「すごく美味しい」と言ってくれたのでうれしかったです。「かつめし」はみんな完食してくれました。父ジョーセは「かつめし」をまた食べたいと言ってくれ、日本のご飯について話したり、ブラジルでの料理についていろいろと話しました。ホームステイ先でのご飯はどれもとてもおいしく、食事の時間はとても楽しかったです。



ホームステイ先の家族が「カナは家族です。いつでも帰ってきて」と言ってくれ感激しました。ブラジルは家族はもちろん、友人をそしてその友人もとても大切にします。友人は家族のように思い信頼するそうです。その気持ちや考えは素晴らしいと思いましたし、だからみんな明るく、フレンドリーだと納得しました。

ブラジルには日系の人が多くブラジルで聞く日本語はなんだか不思議な感覚でした。お別れ会で「上を向いて歩こう」の演奏をすると知っていた人は多く、みんな口ずさんでくれました。ブラジルで日本の音楽が聴けたことがうれしかったです。

日本食の店や食べ物も多く、ブラジルではサーモンのお寿司やちゃんぽんのような焼きそばなどもありました。

ブラジルで自分が思っていたより日本を感じる事ができた気がします。

ブラジルでは様々なところを訪問させていただきました。特に印象に残っているのは学校訪問で、小学生が勉強してる教室に行くと元気にあいさつしてくれました。みんなで写真を撮った後1人の男の子が、カタコトの日本語で「僕は〇〇です」と日本語であいさつしてくれたことに驚いたうれしかったです。休み時間は手を振ってくれたり、ハグや握手でみんなが迎えてくれました。

高校はスポーツ・勉強と自分がしたいことでお昼からの授業が違うのには驚いたけれど、いい制度だなと思いました。また、子どもに寄り添い、家庭と学校が連携していたのは素晴らしいと思います。日本でも家庭と学校の関係は課題です。子ども1人ひとりをしっかりとみる教育だと感じました。1つの敷地に幼小中高があることで様々な年齢の人と触れ合い話すことができるので、家族のような学校でした。

今回の派遣では多くの体験をさせていただきました。特にイグアスの滝を見たとき「綺麗」「迫力半端ない」と圧倒されました。イグアスの滝の水に打たれ、びしょびしょになったことは忘れられない思い出です。素敵な体験でした。

今回の派遣はどれも一生体験できない体験ばかりで私の一生の宝物で、思い出です。またいつかブラジルに行きたいです。

派遣研修の記録



出発式



サンパウロ空港（GRU）に到着



サンパウロにて、加古川市出身の喜多山さんと会食



東洋人街



マリンガに到着 ホストファミリーと



歓迎夕食会



加古川・マリンガ外国語センター設立 25 周年記念式典



マリンガ市役所表敬訪問



ユニセズマール大学訪問



マリンガ市議会表敬訪問



マリンガ日本公園



広大なトウモロコシ畑での収穫作業



お別れ夕食会での青年アトラクション



ホストファミリーとのお別れ



イグアス国立公園



イグアスの滝・悪魔の喉笛付近



リオデジャネイロ・イパネマ海岸



ドバイ・アブラ乗船

現地の新聞に掲載されました

Visita de japoneses reforça irmandade entre Maringá e Kakogawa

Uma comitiva de oito cidadãos de Kakogawa (Japão) visitou a Câmara Municipal de Maringá, na tarde de ontem (10). Eles fazem parte do 27º grupo de intercâmbio de jovens que vem ao Brasil com a missão de fortalecer o laço de amizade entre os dois países.

Em reunião com o presidente do Legislativo, Mário Hossokawa (PP), eles lembraram dos 110 anos de imigração japonesa para o Brasil e os 45 anos de irmandade entre Maringá e Kakogawa. O encontro foi prestigiado também pelos vereadores Alex Chaves (PHS), Jean Marques (PV), Mário Verri (PT) e o deputado estadual Diego Garcia (Podemos). Eles trocaram informações sobre o funcionamento do Legislativo em ambas as cidades, curiosidades sobre a organização política em cada País e também presentes.

Estavam nesta comitiva o vice-prefeito de Kakogawa, Hiroyuki Ichimura; o vice-secretário da Associação Internacional de Kakogawa, Hideki Morita; a estudante do 4º ano de Enfermagem da Universidade de Kobe, Asuka Takayama (21 anos); a estudante Natsumi Inoue (21 anos), da Universidade de Mukogawa; a estudante Kanã Miyagui (18 anos), da Universidade Feminina de Kobe; a estudante do 3º ano



Comitiva visitou a Câmara de Maringá

de Direito, Nao Oosumi (20 anos), da Universidade de Kounan; a estudante Miu Koguchi (21 anos), da Universidade de Kobe Gakuin e a estudante Yumi Horie (18 anos), também da Universidade de Kobe Gakuin.

Eles chegaram ao Brasil na terça-feira (7) e, até o momento, já realizaram um city tour por São Paulo; participaram de um jantar de boas-vindas na Accma; visitaram o Colégio São Francisco Xavier e o campus da Unicesumar.

O roteiro da viagem dos japoneses pelo Brasil incluirá visita às cataratas de Foz do Iguaçu e os pontos turísticos do Rio de Janeiro. A partida está prevista para o dia 16. (ASC/CMM)

BC aprova aquisição da XP Investimentos pelo banco Itaú

O Banco Central (BC) aprovou, com restrições e limitações, a aquisição de 49,9% da XP Investimentos pelo Itaú Unibanco. O acordo viabiliza o investimento do banco na XP, mas preserva sua independência. "O Itaú Unibanco não poderá exercer influência ou ingerência na XP", informou ontem (10) o BC.

As imposições feitas pela autoridade monetária impedem o Itaú de adquirir o controle da XP e obriga o banco a preservar a independência da empresa. As restrições e

A operação poderá ser feita a partir de 2022 e deverá ser submetida a novo processo de autorização do BC. Caso seja aprovada, o Itaú Unibanco passaria a deter 40% do capital votante da XP. "Portanto, menos que o necessário para o controle", informou o BC.

O ACC tem vigência de 15 anos para as medidas destinadas a preservar a independência da XP e a impedir o acesso à base de seus clientes pelo Itaú; e de 8 anos para as demais restrições.

【JORNAL DO POVO (2018 年 8 月 11 日) より抜粋】

日本人訪問団がマリンガと加古川の姉妹関係を強化

加古川(日本)の訪問団8人が、昨日(10日)午後、マリンガ市議会を訪問した。彼女たちは、2国間の友情の絆を強くするためにブラジルを訪問した第27回青年交流団員である。

市議会議長の細川マリオ氏(進歩党)との会合では、日本人のブラジル移住110年と、マリンガ・加古川姉妹提携45年に触れた。会談には、市議会議員のアレックス・シャーヴィ氏(人権連帯党)、ジャン・マルケス氏(緑の党)、マリオ・ヴェッヒ氏(労働者党)、連邦議員のディエゴ・ガルシア氏(ポデモス)も出席した。両市の議会の役割や、両国の政治組織についての関心、そして出席者たちについても情報を交換した。

訪問団のメンバーは、加古川市副市長の市村裕幸氏、加古川市国際交流協会事務局次長の森田英樹氏、神戸大学看護学部4年生の高山あすか氏(21歳)、武庫川女子大学の井上夏海氏(21歳)、神戸女子大学の宮城佳奈氏(18歳)、甲南大学法学部3年生の大角奈央氏(20歳)、神戸学院大学の小口未羽氏(21歳)、神戸女学院大学の堀江佑実氏(18歳)である。

7日火曜日にブラジルに到着し、この日までに、サンパウロ市内を観光し、アセマで歓迎夕食会に参加。聖フランシスコザビエル学院とウニセスマール大学のキャンパスも訪問した。

ブラジルでの旅程には、イグアスの滝やリオデジャネイロの観光地訪問もある。出発は16日になる予定。

加古川市委託事業

公益財団法人 加古川市国際交流協会

〒675-0017 兵庫県加古川市野口町良野 3 8 7 - 1

TEL : 0 7 9 - 4 2 5 - 1 1 6 6

FAX : 0 7 9 - 4 2 5 - 0 2 0 0
